室町期における公家・武家衆の酒宴（2）

—その作法と遊戯化—

加 藤 百 一

II 酒宴の実態

文明6（1474）年4月3日。東軍の細川政元（勝元の子）と西軍の山名政豊（宗全の孫）との間に和睦が成立し、同9（1477）年11月、西軍方の畠山義就（よしなり）は河内国へ、続いて大内政弘（まさひろ）もまた周防国へ帰国するに及んで、文正2（1467）年正月以来、東軍16万1500、西軍11万6000を動員して諸国武将の間で戦われた11年にも及ぶ応仁・文明の大乱も漸く終熄を見た。しかし、この大乱で都の大半は焦土と化した。（『応仁記』²⁹⁾³⁰⁾）

不計。万歳期セシ花ノ都、今何ゾヤ、孤狼ノ臥
土トナラントハ、適残ル東寺・北野サヘ灰トナ
ルヲ、古ニモ治乱興亡ノナラヒアリトイヘドモ、
応仁ノ一変ハ王法仏法トモニ破滅シ、諸宗皆悉く
絶ヘハテタルヲ、不堪感歎、飯尾彦六左衛尉、一
首ノ歌ヲ詠ジケル。

汝ヤシル 都ハ野辺ノ夕雲雀 アガルヲ見テ
モ 落ツル涙ハ

とある有名な一節から、洛中の廃墟の様が想像されるであろう。それでは、この大乱の最中に、またその前後を通じて、公家・武家の生活状態はどのようなであったのか、その実態を推測することにする。

誰しもが「一天ノ大乱ニナルベキカ」と案じていたように、応仁元（1467）年5月26日朝、突然行動を興した細川勢は幕府（將軍邸）を押え、北側の一色義直邸を焼き払い、さらに義直が領有していた実相院門跡と、同門跡に付属する幕府御倉の正実坊をも占領した。こうして畠山両派の争いから、幕府の勢力を二分する戦争、応仁の大乱に突入したのである。世人はす

でに細川勝元方を「東方」、山名持豊方を「西方」と呼んでいた³¹⁾。

同年（1467）10月に、西軍は東軍の立て籠もる相国寺（將軍邸の東側）を攻め、善美を極めた伽藍は焼失した。大内政弘の参戦で、西軍はやゝ優勢裡に戦は一段落し、

自今以後は、献身方共に羸れて、互に弓箭を停止、相国寺の間に要害を構へ、堀をほり、何を期すともなく取合³²⁾（『応仁記』）

ということになった。ところで、現実的には天皇は將軍邸（室町第）に迎えられ、東軍は將軍をも擁していた。

官軍を以て東と為し、賊軍を以て西と為す。天子、相府（幕府）に行在^{あんざい}す³²⁾（『応仁記』）

とあるより確認される。

ここで驚ろくべきことは、この合戦の最中における將軍義政の行動である。相国寺焼失の余煙が將軍邸を覆って、西軍の乱入必至とみられ、御台所以下上臈女房たちは皆逃げ出そうと慌てふためいているのに、独り將軍は、

少しも御驚きなく、常の御気色にて御酒宴等も有しと也³²⁾（『応仁広記』）

であった。彼は東軍・西軍のどちらが負けても自分だけは無関係と思ってか、呆れ果てゝ何とも言い様がない。

ところで、この長期化した戦乱を通じての將軍家及び幕府の実態はどのようなであったろうか。奈良・興福寺大乘院門跡尋尊は、『大乘院日記』に、

公武上下 昼夜大酒、明日出仕之一衣も酒手下行、奉行方者供ハ、当年中無為儀無^い之者、各可^い三遂

The Feast of Court Noble and Warrior Class in MUROMACHI Period.

—The manners and its playful mood as to the Feast—

Hyakuichi, KATO (*The Japanese Society for the History of Brewing*)

天-支度（応仁元（1467）年七月廿七日条〈『後鑑』第223巻〉所収）

と録している。つまり、応仁の大乱の最中、最も不安定な政局の收拾に当らなければならない立場にあった「公方（將軍義政）は大御酒、諸大名は犬笠懸^{いぬかさかけ}」などに現^{うつ}を抜かしていたのであった。一方、武士共はといえば、幕府出仕のさいの衣裳まで酒代に換え、逐電の支度をしている仕末³³、なかには衣装一つさえなくて出仕できないものもいる仕末、公・武家衆の窮乏と厭戦気分の蔓延ばかりか、武士は心の性根まで腐り切っていたのであろうか。

なお、『大乘院日記』には続いて、

御台一天御計^{おほからい}之間、料足共不^レ知^レ其数^レ御所持、陣中大名小以^レ利平^レ借^レ用之^レ、只一天下ノ料足ハ、此御方ニ有^レ之様ニ見畢（同条）

とある。「御台一天御計」、つまり天下の実権を握っていたのは將軍義政でなく、実際には御台富子であった。御台は、自らが備蓄していた巨万の富を、戦費に困っている東・西両軍の大・小名に高利貸していた。例えば、

畠山左衛門佐、先日千貫借用申（『大乘院寺社雜事記』）

つまり、西軍の畠山義統^{よしつね}に1000貫貸付けたことが知れる。更に御台は米蔵を建て、米商売にも手を出そうとしていた。

近日又米倉事被仰付之、可有御商由御支度、大儀之米共也云々（『大乘院寺社雜事記』）

いわば、米商売をするために、米蔵の事を仰せつけられた、という世評が立ったのも当然かも知れない。

かくして、天下の富の多くが御台の手に握ぎられて、それがどれほどあったのか計り知れなかったという³⁴。

2・1 公家・武家の大酒

前記『大乘院日記』で注目すべきことは、

公武上下 昼夜大酒（応仁元（1467）年七月廿七日条）

と録され、また『後鑑』にも、

公武耽^レ酒、昼夜酣醉（同年同月同日条）

などと記されていたその実態である。

これらの記事は果して本当だろうか。少し誇大表現ではなかろうかと疑いたくなるが、以下の一、二の事例を見れば、否定できないことが分かるであろう。

2・1・1 公家広橋兼頼の酣醉

応仁9（1477）年8月、將軍義尚^{よしまさ}は両親義政・富子夫妻を招いて犬追物を催した。『長与宿弥記』に

今日 於^二將軍御所馬場^一千疋之犬追物被^レ始、三ヶ日可^レ有^二御張行^一云々（応仁九（1477）年八月十九日条（『後鑑』第二百二十四巻）所収）

と録され、また、

今日、將軍御所御犬追物也、准后（義政）同御台等渡御、有^二御見物^一云々（同年同月廿一日条（同書、同巻）所収）

ともあるので確証できる。

こゝで注目すべきことは、公家広橋兼頼の同年8月22～25日の4日間における行動である。彼の「昼夜大酒」の行動を鈴木³⁵の所見を参照しつつ追跡調査すると、以下のことが確證される。

將軍が同年同月19～21日の3日間にわたり盛大な犬追物を催したが、その催しものが終わった翌22日以降、広橋兼頼は、

（1）その翌日（8月22日）、幕府和歌会に出す詠草を義政にみてもらうために將軍邸に出仕し、そのまゝ深夜まで義政の酒の相手を努めた。

（2）翌日（同月23日）、二日酔のところを呼び出され、出仕するとそのまゝ酒席へ。その席では観世が義政夫妻から与えられた裳をつけて一曲演じた。そしてまた「大酒」。夜半やうやく義政は小河邸に帰った。

（3）翌朝（同月24日）、兼頼は二日酔で頭があがらずにいたが、義政から幕府和歌会の通知を受けると、直ちに小河邸へ駆け付け、求められるまゝに詠草を添削してもらって「祝着千万」と喜ぶ。ついでに一旦参内、夜退出したその足で小河邸へ、また盃を与えられて「沈酔」。

（4）翌日（同月25日）、幕府和歌会が終ると、また義政の酒の相手に呼び出され、「面目の至り、畏入るものなり」と「感激恐縮」の態であった。

彼のこの4日間の行動は、室町時代の公家に残された唯一の、はかないプライドである和歌を義政に添削してもらったとはいえ、専ら室町殿（義政）の酒のお相伴^{しょうばん}を務めたことになる。連続4日間の酒宴はさまで驚ろくには当たらないが、それにしても4日に及ぶ、「大酒」。次の日二日酔、「沈酔」。まさしく、「昼夜酣醉」であった。耐アルコール性の相当強い人でも、肉体的疲労は相当なものであったろう。

なおこゝで特記しておきたい事は、室町期の公家衆のプライドのなきて、『応仁の乱』の著者鈴木が悲憤慷慨するのも当然であろう。それも兼頭のような下級の公卿などは別としても、平安貴族文化の保持者として、また大臣家系の文化人・歌人三條西実隆^{さねたか}ほどの人物が、

この和歌会の詠題を前將軍義政から与えられて、べつだんくやしいとも思わず、その三日後、義政夫妻と新將軍義尚をむかえた朝廷での酒宴で、「数献、深夜に及ぶ」。この三人をむかえた酒宴が「無為無事」におわったことを「珍重珍重」としている始末である³⁵⁾。

酒宴のことは別として、このような有様はあまりにも惨め過ぎて、情ないことである。応仁の大乱で、公家衆までが凡ゆる点で凋落してしまったことを認めざるを得ないであろう。

2・1・2 將軍義尚の耽酒

「耽酒^{よしまさ}の人」將軍義尚^{もどり}について、『大乘院日記』は、二日夕方、新將軍御本鳥於被切^{もどり}³⁶⁾、希有事也、酔狂之故云々。当家御作法、行末無^{もどり}心元^{もどり}者也（文明十二（1480）年五月三日条〈『後鑑』第228巻〉所収）

と録している。文明5（1473）年12月、義政の後を継いだ新將軍義尚が、飲酒酩酊して突然自分の髻を切ったというから大珍事であった。この時將軍は16歳であったから、少年から青年への転換期に見られる急性アルコール中毒による発作的行為³⁷⁾であったのだろうか。

彼は平素から酒色に耽り、食事ばかりか、生活態度も乱れていた。このことは『宣胤卿記^{のぶたけきようき}』³⁸⁾に、

平素一向無^{もどり}御食事^{もどり}、只水・酒、御姪乱也（文明五（1473）十二月廿四日条〈『後鑑』第245巻〉所収）

とあるので知られる。それでも、彼がやうやく政務の様子を見せ始めたのは、文明13（1481）年以降らしく、

今年より、大納言殿一向世務御存知あるべしと、『実隆公記^{（義尚）}』³⁹⁾に録されているので推測できよう⁴⁰⁾。ところが、義尚にはこれといった政治の手腕が見られないので、義政は不満をもち、義政・義尚父子の間の不仲は公然の秘密であったといわれている。と

もかく彼は生活そのものが荒れていたらしく、『大乘院寺社雑事記』（文明十五（1483）年三月十八日条）から、彼の生活態度が知られる。

義尚はこの年末だ内裏へ参内もせず、義政とも対面していない。昼は一日中寝ており、夜は「御所中昼の如し」と、昼夜逆転の生活を送っていた⁴¹⁾。

それでも將軍義尚は長享元（1487）年9月、近江の守護六角高頼が大乱の間に寺社本所領を押領したのを責めて討伐に向ったが、その出陣中、同3（1489）年3月26日、同国^{まがり}鉤（現、滋賀県栗太郡栗東町）の陣中で25歳の若さで病没した。出陣前に黄疸を病んでいたの、肝臓病が將軍の死を早めたのかも知れない。在陣1年7ヶ月、この間、作戦に心を砕いていたわけではなく、和歌会を開いたり、公家・僧侶の訪れも少なかったという。なほ、これほど長く將軍が在陣した事例はかつてなかった。また応仁・文明の乱の作戦にもこの將軍はまったく無関係であった⁴²⁾。まこと義尚は、不思議な將軍「耽酒の人」というほかはない。

2・2 酒宴に関係深い語

前述した公家広橋兼頭の「酣酔」例や將軍義尚の「耽酒」例を見ると、室町時代の公家・武家衆たちは、昼夜を分たずよくも酒宴ばかりしていたものと唯々呆きれるほかはない。というより、これらの記録は本当だろうかと疑いたくなる。この疑いを解く手法の一つとして他の資料、例えば当時の都の貴紳の日記類である『満濟准后日記^{まんさい}』・『看聞御記^{かんもんぎ}』・『蔭涼軒日記^{おんりょうけん}』・『実隆公記^{（義尚）}』³⁹⁾などから調査抽出することにした。

その結果、これら日記類には、「大酒」・「大飲」・「沈酔」などといった大酒飲みに関係深い用語が、結構目に留った。そこで、今試みに『満濟准后日記』と『看聞御記』の両日記を取り上げて、酒宴に関係深い用語の出現頻度を数え、酒宴の実施とその実態、また致酔状態などについて検べることにした。その結果を系統化して第1表～第5表に掲示した。

以下、これらから得た知見を記述する。

（1）酒宴に関係深い用語を、酒類・酒器・酒宴・飲酒・致酔・その他など、6つに類型化した。これらの中で出現頻度が最も多いのが飲酒・酒宴の類型（pattern）で、これら2つの類型の合計出現率は『満濟准后日記』では全標本数の82%、『看聞御記』では

78%という高い値を示した。次いで出現率の高いのが両日記共に酒器の類型で、『看聞御記』15%、『満濟准后日記』13%で、飲酒・酒宴の類型から見れば極めて低いことが知れる。なお出現率の低いのは致酔、酒類、其の他など、3つの類型で、両書共に出現率5%にも満たない。

(2) 次に、問題の「大酒」・「大飲」という用語を抜き出し、この出現率を調べたところ、『満濟准后日記』では酒宴及び飲酒の類型を合計した標本数のわずかに1.9%、『看聞御記』では1.2%に過ぎない。ところが、飲酒の類型の標本数だけに限り「大飲・大酒」の出現率を見ると、『満濟准后日記』10/48、『看

聞日記』53/258、両書とも21%であった。

具体的にいえば「大酒・大飲」の出現頻度は、『満濟准后日記』では10/22で、年に0.45回(同記は、応永18年3～11月、同19年、同27年10～12月、同30年10～12月、永享7年5～12月分が欠如、調査年の合算22年1/12となる)、『看聞御記』では53/23で、年に2.3回(同記は、応永33～35年、永享11～12年、嘉吉2年分が欠如、調査年の合算23年となる)である。「大酒」「大飲」といっても個人差があるので量的にははっきりとは決め難いが、年に0.45回とか、2.3回程度の「大酒」「大飲」ならば驚ろくには当たらない。今日でもそれ以上の人が結構多くいる

第1表 『満濟准后日記』にあらわれた酒宴に関係深い語

年 代	酒類	酒器	酒宴	飲酒	致酔	その他	小計
1411 (応永18) 年 (3～11月欠) (応永19年欠)			3				3
13 (〃 20)			12		1余酔		14
14 (〃 21)			15	2			17
15 (〃 22)		1	7	1	1宴酔		10
16 (〃 23)		2	14	1	1二日酔		18
17 (〃 24)			9		1酔		10
18 (〃 25)			13	2大飲	1沈酔		16
19 (〃 26)			10	1大飲	1沈酔		12
20 (〃 27) (10～12月欠)			2		1沈酔		3
21 (〃 28)			1		1酔		2
22 (〃 29)		2	11	1大飲			14
23 (〃 30) (10～12月欠)			7		1酔		8
24 (〃 31)	2		5	1			8
25 (〃 32)		5	11	2大飲	1酔	1	20
26 (〃 33)		1	12	4大飲 ²	1沈酔		18
27 (〃 34)			2	1	1沈酔		4
28 (〃 35)		4	6		1酔倒		11
29 (正長 2)		12	73	4		1	90
30 (永享 2)		72	80	12	1沈酔	1	116
31 (〃 3)	4	6	53	4			67
32 (〃 4)		13	44	1	1沈酔		59
33 (〃 5)		2	25	3	3	2	35
34 (〃 6)	1	12	46	6大飲 ²	1沈酔		66
35 (〃 7) (5～12月欠)	1		15	2			18
合 計	8	82	476	48大飲 ¹⁰	19	6	639
百分比(%)	1.3	12.8	74.5	7.5	3.0	0.9	100.0

はずであるから。

(3)「沈酔」とは、ひどく酒に酔うとか、酔いつぶれること、いわば泥酔してダウンすることである。なお「沉醉」の「沉」は「沈」の異字体であるから、沉醉は沈酔と同義である。

ところで、酒宴に関係深い語の全体から見れば、「沈酔」を含めた致酔の種類の出現率は、『満濟准后日記』3%、『看聞御記』5%と極めて低いことが第1表～第2表から知れる。ところが、致酔の種類だけに限って算出すると、「沈酔」の出現率は、第1表の『満濟准后日記』では8/19で42%、第2表～第3表の『看聞御記』からは50+105/275で56%、かなり高い数値を示していることが分かる。

(4) 試みに『看聞御記』について、致酔の種類に

属する語を、酩酊の程度によって類型化し、第3表の分布頻度表を作成した。こゝで興味あるものは、「酔」「酔中」「酔気」「吐酒」(ほろ酔い～酩酊後期、血液中のアルコール濃度0.05～0.3%)の程度と、「酔臥」「沈酔」「沉醉」「酔狂」(泥酔～昏睡期、血液中のアルコール濃度0.4～0.5%前後)症状⁴³⁾との出現率を比較すると、25%対75%となる。つまり致酔の種類だけに限定すると、泥酔～昏睡期の酔態を表わす用語は1:3の割合で出現したことになる。ここで感違いないことは、だからといって酒を飲むと4回のうち3回は「沈酔」状態になる。いわば泥酔、ダウンすることを意味しているのではない。

(5) 酒宴に関係深い用語全体のうち、出現頻度の最も高いのは何といても酒宴の種類で、第1表の

第2表 『看聞御記』にあらわれた酒宴に関係深い語

年 代	酒類	酒器	酒宴	飲酒	致酔	その他	小計
1416 (応永 23) 年		22	117	8大飲 ³	8	2	157
17 (// 24)	1	14	183	3	13	5	219
18 (// 25)		28	111		7		146
19 (// 26)		19	121	4大飲 ²	13	3	160
20 (// 27)	1	20	156	10大飲 ¹	17	5	209
21 (// 28)		25	113	1	7	1	147
22 (// 29)		24	193	2大酒 ¹	19	1	239
23 (// 30)		21	137	5大飲 ⁵	10	2	175
24 (// 31)	1	33	147	6大酒 ² 大飲 ⁴	13	4	204
25 (// 32)		29	190		9	9	237
(応永 33～35 年欠)							
29 (正長 2) 年			7				7
30 (永享 2) 年		11	98	17大飲 ¹²	4	2	132
31 (// 3)		23	106	21	6	1	157
32 (// 4)	2	57	213	7大飲 ⁵	12	2	293
33 (// 5)	2	53	237	6	12	4	314
34 (// 6)		47	254	21大飲 ⁷	20	6	348
35 (// 7)	3	62	457	68大飲 ¹²	49	3	642
36 (// 8)	3	114	318	33	15	16	499
37 (// 9)	4	51	177	8大飲 ⁶	9	9	258
38 (// 10)	12	76	265	18	19	7	397
(永享 11～12 年欠)							
41 (嘉吉 元) 年	2	30	107	2	6	3	150
(嘉吉 2 年欠)							
43 (// 3)	9	58	262	16大飲 ³	7	4	356
44 (// 4)		6	18	2			26
合 計	40	823	3987	258大酒 ⁵³ 大飲 ⁵³	275	89	5472
百分比(%)	0.7	15.1	72.9	4.7	5.0	1.6	100.0

『満済准后日記』では74.5%，第2表の『看聞御記』では72.9%であった。

次に、酒宴をあらわす用語の種類によって分類し、その分布頻度を第4表～第5表に示した。その結果、『満済准后日記』については、最高出現率を示したのが「献」の類型で80%，次いで「盃」・「酒」・「宴」の類型順であった。第5表の『看聞御記』もこれと略同じような傾向が見られ、「献」の類型が60%，次いで「盃」・「宴」・「酒」の類型順であった。なかでも最高出現頻度率は「一献」で、『満済准后日記』では酒宴を示唆する用語の48%，『看聞御記』でも49%で、何れもかなり高い値を示していることが指摘される。

(6) 興味あるのは、年間にあらわれた酒宴の回数である。

第1表の『満済准后日記』を見ると、正長2(1429)～永享6(1434)年には25～80回/年であったから、月平均2.1～6.7回となる。この年代以外の応永18～35(1411～1428)年および永享7(1435)年には1～15回/年であったから、月平均0.1～1.3回に過ぎない。

ところが、第2表の『看聞御記』にあらわれた数字は『満済准后日記』のそれよりずっと高いことが着目される。正長2(1429)年の7回/年、月平均0.6回、それに嘉吉4(1444)年の18回/年、月平均1.5回の分を除いては、応永23(1416)～嘉吉3(1443)年の27年間にわたっては98～457回/年、月平均8.2～38.1回となる。特に永享7(1435)年の酒宴回数が年457回、月平均38.1回、続いて同8(1436)

第3表 致酔程度による分布頻度(『看聞御記』)

年 代	醉	酔中	酔気	吐酒	酔臥	沈酔	沉醉	酔狂	小計
1416(応永23)年			1				3	1	5
17(〃24)			4		8			12	
18(〃25)			2				3		5
19(〃26)		1	3			4	1	1	10
20(〃27)	1		2			6	1	4	14
21(〃28)			1			4			5
22(〃29)		1	5			10		1	17
23(〃30)			3		2	4		1	10
24(〃31)	1		2		1	1	3	2	10
25(〃32)			1		1	6			8
(応永33～35年欠)									
29(正長2)年				1		1	2		4
30(永享2)年									
31(〃3)			2	1			3		6
32(〃4)		1				9		2	12
33(〃5)	1		1		1	3	5	1	12
34(〃6)			1		2	15		1	19
35(〃7)	3	1	7		6	8	20	4	49
36(〃8)			4			2	9	15	
37(〃9)	1		4			4			9
38(〃10)	1		2		2	13		1	19
(永享11～12年欠)									
41(嘉吉元)年	1		2			3			6
(嘉吉2年欠)									
43(〃3)			1		1	4		1	7
44(〃4)									
合 計	9	4	48	2	16	105	50	20	254
百分比(%)	3.5	1.6	18.9	0.8	6.3	41.4	19.7	7.8	100.0

年には年に318回、月平均26.5回となる。とすれば、毎日が酒宴、時には日に酒宴の連続2回のペースでこなさなければ消化できないであろう。したがって、2・1・1の「公家広橋兼顕の酣酔」例、2・1・2の「將軍義尚の耽酒」例が嘘ではなく、真実であったことが確認できるであろう。また2・2の(2)で既述した「大酒」・「大飲」の類型で見られるように、年間の酒宴回数が多く、また仮りに酒宴が毎日毎日催されて、必ず出席しなければならないとすれば、体に影響がないとはいえないであろう。こうした場合には、どのように体をコントロールすればよいのか知りたいものである。

(7) さらに拙稿⁴⁴⁾で見られるように、鎌倉時代の『吾妻鏡』における酒宴を意味する用語を調査した結果と、今回の『満濟准后日記』・『看聞御記』のそれとを比較すると、明らかに相違することが指摘される。

『吾妻鏡』においては、「酒」・「宴」の類型は49%、31%と幾分高い出現率を示しているのに対して、第

5表の『看聞御記』では5.5%、9.4%とかなり低く、第4表の『満濟准后日記』では3.5%、0.8%とさらに低い値を示している。「盃」類型は『吾妻鏡』の15.5%に対して、第4表の『満濟准后日記』は16.2%、第5表の『看聞御記』は25%であったから大差がない。ところが、「献」の類型は第4表の『満濟准后日記』80%、第5表の『看聞御記』60%であるが、『吾妻鏡』にはこの類型はない。このことは、時代の相違というよりも酒宴の表現・分類法などに起因するのであろうが、この点判然としない。

(8) 当時の貴紳の日記、例えば『実隆日記³⁹⁾』を見ると、室町殿夫妻(足利義政・日野富子)・將軍義尚を迎えての宮中での酒宴で「数献及深更」と録され、この酒宴が「無為無事」に終わったことを「珍重珍重」と書き留めている。これは「酒宴乱舞」しなかったので珍重なのか、「沈酔」「酔狂」しなかったので珍重なのか。「無為無事」と「珍重」との関わり合いが明らかではない。

第4表 『満濟准后日記』における酒宴の分類

類型	種 類	出現度数	出現比率(%)
献	一 献	227	47.8
	三 献	77	16.2
	五 献	22	4.6
	数～十三 献	41	8.6
	初 献	11	2.3
	小 計	378	79.5
盃	天 盃	12	2.5
	賜(給) 盃	18	3.8
	献 盃	29	6.2
	勸(進) 盃	4	0.8
	盃(始) 儀	4	0.8
	盃 酌	3	0.6
	一～数盞(杯)	7	1.5
	小 計	77	16.2
酒	賜(給) 酒	13	2.7
	酒 肴	4	0.8
	小 計	17	3.5
宴	垺 飯	2	0.4
	大 饗	1	0.2
	遊 宴	1	0.2
	小 計	4	0.8
合 計		476	100.0

第5表 『看聞御記』における酒宴の分類

類型	種 類	出現度数	出現比率(%)
献	一 献	1,934	48.5
	三 献	166	4.2
	五 献	74	1.9
	数～十余 献	196	4.9
	小 計	2,370	59.5
盃	勸(進) 盃	135	3.4
	賜(給) 盃	102	2.5
	献 盃	29	0.7
	(盃) 数 巡	692	17.4
	そ の 他	23	0.6
	小 計	17	0.4
		998	25.0
酒	賀 酒	86	2.2
	給 酒 (肴)	78	1.9
	賜 酒 (肴)	31	0.8
	勸 酒	12	0.3
	酒 饌	14	0.3
	小 計	221	5.5
宴	酒 盛	266	6.7
	酒 宴	93	2.3
	そ の 他	17	0.4
	小 計	376	9.4
そ の 他		22	0.6
合 計		3,987	100.0

(9) なおこゝで、酒宴に関係深いものにも拘らず、理解し難い用語の一、二を取り上げよう。

1) 酒宴乱舞

『看聞御記』を見ると、「酒宴(盛)乱舞」とか「数献乱舞」などの用語が目につく。恐らく酒盛のさいのどんちゃん騒ぎと思われるが、実は次のような意味である。

「乱舞」とは、^{ごせち}五節・^{とよのあかりのせちえ}豊明節会などの後で、殿上人が余興として演じた世俗的な舞のこと、後代には武士などが酒宴のさいに余興として舞うことも意味した。従って、酒宴において世俗的な舞とか、仕舞などを余興として舞うことを「乱舞」と称したので、「酒宴乱舞」とは式三献の酒宴中に余興舞を添えることであった。

2) 乱酒乱舞

「乱酒乱舞」こそどんちゃん騒ぎかと思われようが、実は「乱酒」とは飲酒作法の一つの型式であった。当時、正式の酒宴型式は式三献であったが、「乱酒」とは宴席で上から下へ順序正しく盃を回した後に、その順序を乱し、また自然に乱れて酒を飲み合うこと、いわば会席した者同志がお互いに盃を取り交わす方式なのである。式三献の正式作法からすれば、酒宴作法を乱しているのが「乱酒」と称した。したがって、「乱酒乱舞」といえば、正式の式三献の方式に従うことなく、さらには酒宴の最中に余興舞などを添えた酒宴の意と解される。

室町時代の社交文化の1つであった酒宴における作法は厳しく守られ、これを乱すものは社交的にも政治的にも無視されねばならなかった。

III 酒宴の遊戯化——競飲の宴

酒の飲み競べ、具体的には酒を飲む分量とか、時間を競い合う競技、つまり「競飲の宴」、或は「酒闘」は、平安王朝以来室町時代の貴紳たちの遊びの中に取り入れられていた。こゝでは更に室町時代に盛行したきゝ酒競技をも加えて、遊戯化された酒宴を3つのタイプに分けて考察する。

これらのタイプのうち、特に「十種酒」などのきゝ酒競技を理解するには、この前駆と見られる「闘茶会」の実際について、具体的にいえば茶会の組立て方とか、茶事の基準など、それ相応の作法を必要としたので、これらの点について対応する茶会の知識を一応

知っておかなければならない。

なお、こゝで注目すべきことが2つある。

(1) 競飲の宴は明らかにギャンブルであった。

酒闘に先駆する茶会を例にとると、これを「茶闘」と別称したように、茶の趣味を戦わせる1種の賭け事であった。何人か集って、いろいろな種類の茶を飲み比べる競技で、多く当てた人が引出物の賞品をもらう。これはまぎれもなく賭博である。また、茶の産地とか、茶を立てた水の出所ばかりか、その他にも、例えば鯉の同じ料理を並べその産地当てをする競技などは、十炷香や十種酒などと競技ルールが多少違っていても、当たりの多いものが賭け物の賞品を勝ち取るという点では何ら変らなかった。こうした闘茶の系譜を引く「十種酒」などの競飲の宴、いわば「酒闘」は間違いなくギャンブルであった。

(2) いま一つ、酒闘は茶会を原点として展開したことである。

茶会はかつて「群飲^{いつめう}飲遊⁴⁵⁾」といわれたように、酒食を伴った集団的無礼講の饗宴で、しかも「闘茶」といわれた団体競技であった。こゝでは、佐々木道誉が西京の大原野で催した大茶会を付記したので理解できるであろう。一方では、当時、侘茶^{わび}といって、多分に禅的境地に溶け入り瞑想的な思想を追求し、さらには獨り、静かに茶を喫するという洗練された手法が既に行われつゝあった。しかし、茶会の本来の性格は娯楽・遊芸的なものであったことを忘れてはならない。

「酒闘」は「闘茶」と同様、集団的な遊びといったところにその原点が求められよう。いわば酒闘は、闘茶の系譜を引いて展開したことに着目しなければならない。

【付記】佐々木道誉の西京・大原野での大茶会

室町幕府開府、南北朝対立の14世期中期頃の世相を風刺した「二条河原落書」に、次のように録されていた⁴⁶⁾。

茶香十炷ノ寄合モ ^{づれ}鎌倉釣^{ありしか}ニ有鹿ト 都ハイトド
倍増ス(群書類従本『建武年間記』建武三
(1336)年二月条)

当時、喫茶^{よりあい}といえ、一椀の茶を回し飲みする「茶寄合^{からもの}」とか、唐物の名物茶器を愛玩する「茶数奇^{すき}」などよりも、「闘茶」の方が流行していた。この落書の

「茶香十炷」とは「十種茶」「十炷香」のことで、10種類ほどの茶とかあるいは香を判別して賭け物を争う遊び、いわば「闘茶」「闘香」のことである。

こうした遊びに関連して、『太平記』(巻39⁴⁷⁾)には次のような興味ある挿話が語られている。

貞治5(1366)年春3月、幕府の管領斯波高経が將軍義詮邸で連歌の宴を催すことになり、武将らも招いたところ、佐々木道誓はこの招きを無視し、同日に京の町中の芸人を一人残らず集め、一族一党と共に西京の大原野で大茶会を催した。この遊興の壮観さについて、山崎⁴⁸⁾は『太平記』を引用して、

寺の高欄を金欄で包み、道には唐物の毛氈を敷きつめ、4本の桜の巨木を生け花に見たてゝ、根もとに巨大な真鍮の花瓶を飾らせた。また一斤(600g)もの名香を丸ごと炷せた。

と述べ、さらに同記⁴⁷⁾には次のように録されている。

その蔭に幔を引き曲衆を立て並べて、百味の珍膳を調へ、百服の本非⁴⁹⁾を飲みて、懸け物山の如く積み上げたり。

こゝでの茶会は「本非茶勝負」であったようで、なお賭け物の賞品は山のように積まれていた。また役者たちは踊り舞い、白拍子や伎女などは濃やかに歌ったので、気に入った芸人には座中の人々が着ている物を脱いで投げ与えるなど、この大茶会は夜更けるまで続けられた。なお、大茶会の有様は、山崎⁴⁸⁾が指摘しているように、都中の評判となり、道誓の政治的效果は大きかったといわれている。いずれにしても酒池肉林の大盤振舞いの大茶会は、社交性をもつ政治的意義を一層高めた。さらに、

社交というものは人間の心を動かすという点で、芸術であると同時に政治である。

という山崎⁵⁰⁾の所見からも推測できるように、人の心を動かすような演出、それが室町時代の芸術であり、社交文化であり、政治であったのであろう。

(以下次号)

文献及び注記

- 29) 歴史学研究会編『日本史史料[2] 中世』295頁(岩波書店、1998)
- 30) 『応仁記』は、応仁の乱の原因と洛中合戦の様子について、東軍の将細川勝元、西軍の将山名

宗全の死にいたるまでの模様を詳述した室町時代の戦記物。3巻、作者不詳。

本記は、文明5(1473)年、両軍の大將細川勝元と山名宗全の死後間もなく作成されたという説と、この頃に原形ができて16世紀中頃完成したとする説とがある。さらに、本記は『応仁別記』・『応仁略記』と共に『群書類従』に収む。

- 31) 鈴木良一『応仁の乱』57～59頁〈岩波新書〉(岩波書店、1973)
- 32) 前掲『応仁の乱』62～64頁
- 33) 前掲『応仁の乱』106頁
- 34) 田端泰子『女人政治の中世』107～108頁〈講談社現代新書〉(講談社、1997)
- 35) 前掲『応仁の乱』108～109頁
- 36) 我が身を敵の手に委ねる意志を表明するために、敗軍の武将がみずからの髻を切って敵に渡すといった慣習のあったことから、髻は社会身分の表徴の手段といった意味を超えて、その人の生命そのものとさえ看做されていた。
- 37) 高須俊明『酒と健康』69～76頁〈岩波新書〉(岩波書店、1987)
- 38) 『宣胤卿記』は、室町中期の公卿中御門宣胤の日記。欠落はあるが、文明12(1480)～永正14(1517)年の「日次記」や「引付」などが現存する。
- 宣胤卿は長享2(1488)年に権大納言に昇任、公家社会の中枢に位置しており、書道・歌道にも長じていたので、宮廷・公家の生活・文化に関する記事は特に貴重視されている。
- 39) 『実隆公記』は、三條西実隆の私的生活記録である。公は室町後期、長く侍従を務めた後に、内大臣に進む。文筆に長ず。
- 40) 前掲『女人政治の中世』131～132頁
- 41) 前掲『女人政治の中世』135～136頁
- 42) 前掲『応仁の乱』175～176頁
- 43) 田多井吉之介『酒飲みの医学』125～127頁〈創元医学新書〉(創元社、昭和44年)
- 44) 加藤百一「鎌倉武士と酒」・『史研究』17巻、1～29頁(日本酒造史学会、平成13年)
- 45) 足利尊氏が建武3(1336)年11月に定めた「建武式目」17条の中に、次の一条がある。
- 「群飲佚遊を制せらるべき事
- 格条の如くんば、厳制殊制殊に重し、剩え好色に耽り、博奕の輩に及ぶ。此外又、或茶寄合と号し、或は、連歌合と称し、莫大の賭に及ぶ。其の費、勝手計之難きものか」

文中、「佚遊」とは勝手気まゝに遊ぶ意。

- 46) 井上清『日本の歴史（上）』187～188 頁〈岩波新書〉（岩波書店，1963）
- 47) 山下宏明校注『太平記(五)』（巻 39，諸大名道朝を讒する。付たり・道誉大原野花の会の事）428～429 頁〈新潮日本古典集成〉（新潮社，昭和 63 年）
- 48) 山崎正和『室町記』45～46，188～190 頁〈朝

日選書〉（朝日新聞社，1976）

- 49) 京の^{とがのを}梅尾の本茶と，宇治などの非茶とを飲み較べて，本非を当てる闘茶をいう。
なお，本非茶については，本稿の 4・3 [付記 2] の項参照。
- 50) 山崎正和『室町記』180～182 頁〈講談社文庫〉（講談社，昭和 60 年）